

患者だけの帰国なので、船内生活、舞鶴上陸、宿泊手続中も平穩であった。

昭和二十三年七月二十三日は上陸記念日として忘れられない。米軍の取り調べが三十分程あり、翌朝北海道留萌市に向け列車に乗るも、満員で何日かかかって着いたかわからない程だった。途中、父親に迎えに来るよう電報を打つも、市役所の係員だけだった。事情を聞くと、父親は昭和二十一年二月十八日に死亡と説明された。弟も海軍でソロモン諸島の戦いで戦死。三人家族で泊まる家がなく、係員も復員のため住宅を世話するわけにいかず、戦前勤務していた会社の上司か友達の人に一時世話になるように言われ、冷たい返事、冷たい役人と腹を立てた。

よし今に見てる、軍隊生活と抑留生活の経験で、必ずゼロから出発して立ち上がって見せると覚悟を決め、友人のところへ世話になりながら復職、二年後結婚。妻と二人で一生懸命に働き、無事定年を迎えることが出来た。

妻は平成三年に死亡するも、息子と孫と同居、老人

クラブの役員として、皆さんと共にふれあいをもって生活している。

シベリア抑留体験記

千葉県 鈴木 博

私は大正二ヶ月生まれ、戦争末期に死線をくぐり抜け、戦後シベリアに強制抑留され、二度三度いや数度死線を乗り越えてきた。

私は昭和十七年徴集、昭和十八年四月十六日千葉県東葛飾郡柏東部第一〇二部隊第四航空教育隊に入隊、四カ月で一期検閲終了後、満州遼陽第二〇一飛行場大隊補給中隊軍機に同年九月上旬転属、南満州昭和製鋼所（満州製鉄所）に防空隊として任務に着き、鞍山第二航空司令部貨察隊旋隊に転属、昭和二十年六月十日新京南飛行場に転進。この時点において鞍山飛行場に同属の独立飛行場第八十一中隊と合流、二十年八月五日付にて湯揚子羽攻撃飛行隊に派遣され、八月十日湯

揚子飛行場に着任した。特攻隊要員として飛行機、重
軽爆撃機を集結中に八月十五日の敗戦を迎えた。

八月末に鞍山市内旧自動車隊の三角兵舎にいた。ソ
連軍の命令で満州製鉄所の施設の解体作業に日本軍隊
が動員された。一部情報によれば満州製鉄所従業員、
特に満人にソ連軍の命令で解体作業を従事させようと
したが、何十年と製鉄所に働いてきた人達は、その解
体作業には殺されても参加しないと作業に出て来なかつ
た。止むを得ず在鞍部隊に要請、いや強制的に命令し
て、朝に夕べに星を見ながら朝六時から夕方六時まで
ソ連兵がマンドリン銃（自動小銃）を肩からぶら下げ
ての監視付きで労働させられ、その機材は満鉄の船舶
でソ連へどんどん運搬され、短期間に終わらせるため
に〇〇工場は何万とか懸賞金を懸けていたが、そのお
金は製鉄所本社の金庫を占拠して支払っていたようだ。
九月半ばまでに解体作業は終わり、製鉄所幹部社宅
一三〇戸の警戒に将校以下十三人、私もその一人とし
て社宅内に起居して警戒任務に就き、十月上旬に大宮
中学校に集結して、十月十二日午後富士見小学校に集

合、シベリア行きが編成された。

夕方鞍山駅出発、私達は名前を呼ばれず編成もれで
あった。曹長以下下士官三十人、兵六人ポツンとあと
に残り一晚富士見小学校に泊まった。その時、八路军
将校、下士官、兵十数人が部屋に入ってきた。私達は
物音に眼をさますと、八路军の一人が「皆さんはシベ
リアへ連れて行かれてしまうから八路军へ入ってください、
優遇しますから。また日本の兵隊さんが大勢い
るので是非」と言って帰って行った。敗戦後一カ月足
らずで我々はすでに強制労働に従事していたのだ。敗
戦の惨めさである。十月に入り逃亡する者もあり、目
標を失った船の航海と同じで、イラクへ行くとかいろ
いろな情報が飛んだ。それも信用できないが、軍人が
行かなければ一般人、俗に地方人の男子が家族を見捨
てて行かされるとのことで、私達若い者は独身と若さ
の軍人の誇りが当時はあったので決心し、十月十三日
編成して貨車に乗り鞍山駅を出発した。

ソ連軍の年齢層は十代から五十代まで、老若混じっ
た人間構成だった。貨車は六十トン車で内部は二段に

仕切り、床板中央部を直径三十センチ位丸く切り抜いて大小便共用に使用した。何と言ってもシベリア鉄道である。夜も昼も走る。走行中は扉の鍵を掛けてしまいい、貨車ごとにソ連兵が自動小銃を持って警戒している。車両七、八十両連結して機関車二台で炊事車も連結している。駅に着くと各車両から食事を受領に行ったり大小便を済ませたり大変である。右側にバイカル湖を見て走り、日本海に着いたと騒いだのも歩哨の「東京タモイ、東京タモイ」のせいだったか。

二十日ほどでノボシビルスク駅に夜着いた。入浴との伝令があり一同待機して、身軽な服装で行けとのことで間もなく着いたが行列で、それも屋外で寒く、身震いしながら待った。ようやくして屋内に入り、入浴といってもシャワー式で、シャワーを浴びていると身体中がかゆくなって来て手拭いでこすると垢がポロポロとよじれ落ちる。突如誰かの「あまり強くこすると風邪をひくぞ」との声に間髪を入れずに「あっそうか」と思わず大声で、一同顔を見合わせた。何日ぶりかでありこりと笑みが見受けられた。輸送列車の食事では満

腹にならないが、貨車専用停車駅に着くとソ連人の牛乳フレブ（パン）、干しアンズ等の食料品と、初めのうちは捨てたりしていた軍足、シャツ等汚れた衣類でも物々交換できた。鞍山出発時に新しい毛布、衣類等多量に持っていたのが幸いした。

先勝国のソ連に入っても物資不足が目立っていた。十一月十三日ウズベク共和国タシケント駅到着、我々二百人が下車。大きな荷物を背負い、また両手に持ち、薄い雪解けの道路を自動小銃を肩に掛け不気味なソ連兵に警戒されつつ、行き先も分からず長蛇の列で約一時間歩き、途中二、三回休憩をとって着いた所が仮収容所らしく、門から入ってやれやれと思ったが直ぐに屋内に入らず屋外に待機。やがて日が暮れて皆いらいらが激しくなって来た時漸く二つの部屋に灯がつき、二人のソ連将校が現れ、二人ずつ荷物を持って検査が終わった順序に舎内へ入る行程と分かった。やがて出て来る人は入る時と異なり大きな荷物が没収され、半分以下に減らされてがっかりしながらぶつぶつ言っていて舎内に入って行く。束の間、さすが百戦の勇士といわ

んや、機転と思われる。誰かが外で順番を待つ戦友に「荷物、タバコ、靴下等束ねておいては駄目だ。没収されるからバラにしておけ」と叫んだ。また、特に貴重品の時計等は身体に着けておけば外套の上からポンポンと叩くだけでOKとなると教えられた。早速実行したら没収品も少なく済んで一安心した。数時間費やしただろうか、全部終わって夜も大分更けた。黒パンとスープが少量の夕食であった。次にトラックに乗って町へ入浴に行き、眠りについたのは夜明け間近であった。

収容所の位置は高い所に位置しているブドウ酒工場の建設用地らしかった。数日経過したある日、糧秣受領の使役で収容所外へ出た。建設機械等があり、下の方に民間飛行場が見え、ダグラス旅客機が離着陸していた。収容所周圍は有刺鉄線を張り巡らし、四隅には高さ三メートル位の望楼があり、昼夜ソ連兵が自動小銃で監視していた。約四週間ゴロゴロ毎日遊んで過ごしていた。そのうちに、楽しみな三回の食事も、初めのうちはわれ先にと飯盒を持って行ったのに当番が叫

んでもだんだん急いで行かなくなってきた。やがて原因が分かった。実は炊事場の大平釜で、材料は粟の日本で言えば重湯とお粥の中間程度の食事を作るのだが、炊事当番が苦勞して平均に分けるつもりでも先に行くとうとうしても最初は水分が多くなり、後になる程濃くなってくるのであるべく遅く貰いに行く。他に何もないので人間本能のしからしむるところであった。

十二月半ば頃から建設前の土方作業が始まり、作業は収容所から十二、三分の場所、我々の前にドイツ、イタリア人が作業していたと聞いた。一輪車で土を数十メートル離れた地点に運ぶ作業で、ソ連監督にピストラ、ピストラと怒鳴られ作業に従事した。三週間ぐらい続けているうちに栄養失調者が日一日と増加してきた。病名は黄疸で、病気にかかっても医療設備もお粗末で、重病人は街の病院へ、軽い病人は入室となった。

十二月終わりに技術を持っている人の調査があり、通訳の下に必要事項を記入してその書類提出後四、五日したある日、突然二十人くらいであったらうか、名

前を呼ばれ、お前たちは移動だと言われ、身の回りを整理し、次の収容所タシケント第一収容所に向かった。この時はトラックで輸送され、二、三日過ぎ、早速タシケント駅付近の機関庫の中にある機関車の全修理を行った。作業は三交替制で日本人は一、二交代、午前八時から午後五時までと、午後五時から午前一時まで。午前一時から朝八時半まではソ連人。勤務時間は一日八時間が守られていた。

朝六時三十分集合、出発は七時、作業場に向かった。ソ連はすべて国営であった。日本人はロシア人グループに配属されたが、技術はロシア人の方が劣っていた。しばらくしてノルマと実績がパーセントで貼り出されるようになった。第一収容所は約二千人くらいいて、ソ連軍司令部が近くにあった。衛生面も女医の中尉、大尉がいて毎朝診察を受けられたが、六時からの診察は検温で、体温三十八度未満ならば作業に行かなければならなかった。栄養失調とか色々精神的ハンディが原因だと思うが、神経痛、リウマチ等の人は熱が平熱のため休ませてもらえず、大分苦しんでいた。

二十一年七月頃から第一収容所にも民主運動教育が始まり、各ラゲルから五、六人単位で集結し、指導者は日本人で、表面はソ連とは関係なく自発的だと言って二週間ぐらい教育していた。八月からは教育を受けた人達が幹部リーダーとなって内部、外部業務を司るようになった。天皇制反対、反動分子摘発で旧将校等は集会の壇上で吊るし上げられたりして、戦前の制度が一八〇度変わっていった。同じ日本人同士で情けなく、シベリア抑留中三年間自由を束縛され、心身の苦悩は筆舌に尽くし難く、希望もない暗い日々を過ごした。

いつかきくと帰るんだと戦友同士励まし合って生きてきた。「東京ダモイだ」と言われ、喜ばしておいて実は第一収容所から第七収容所に転所させられた。収容所に着いてもダモイの気配は全くなかった。囚人が仕事をしていた煉瓦工場での煉瓦作りの重労働を約半年ぐらいさせられた。毎日歯を食いしばって、帰るまではと働いた。

やがて二十三年夏の終わりであった。疲れて収容所

に帰って来たらいつもと雰囲気が違ったのを感じた。やはりダモイだとのことで収容所内が身の回りの整理を始めた。翌日出発と聞かされたが、床に入り周囲が静寂になったとき隣に寝ていた戦友が「今度は本当らしいなあ」と話すと、皆考えは同じようで、各所での話し声がいとも違つてよい感じだった。翌日貨車に乗せられてノボシビルスクからシベリア本線バイカル湖森林地帯を経てハバロフスクと順調に通過、朝早くまだ外は暗いうちに貨車が着いた。誰かが「ナホトカに着いたぞ、波の音が聞こえる」と大声で思わず叫んだ。夜明けとともに周囲を見ると間違ひなくナホトカ収容所であった。漸く待ちに待った時が来たと思ひながらも、乗船して出港するまではと嬉しさと不安の気持ちが交錯していた。

収容所は二泊三日位で数カ所で検査され、やがてナホトカ港に輸送船が入港してきたということであった。後で分かったことだが、日本から引揚船がナホトカに入港してから出発するまでの時間が制限されているとのことであった。港に向かって歩く足も軽く、引揚船

のタラップを一步一步喜びをかみしめて上つた。見上げれば目の先に懐かしい日の丸がはたみている。これ程日の丸をありがたいと思つたことはなかつた。船上の人となり船も出発した。ナホトカ港の付近には仲間が働いているのが見える。何かしら慰めの言葉をかけてやりたい気持ちであつた。船名は「明優丸」、貨物船だったが、日本海の荒波を乗り越え舞鶴港へと船は進んだ。

夜、無事に舞鶴港沖合に到着。翌日朝もやの中、人員点呼、検閲も終わり、六年ぶりに見る日本。舞鶴の竹藪が風にゆれ、また黄金に実つた稲穂、天然色に輝く故国の美しさに、生きて帰れてよかつたと思ひ無量だった。喜色満面とはいかないが前途多難を乗り越えてここに祖国の土を踏んだのだ。舞鶴で諸手続きを済ませ、故郷へ帰り、両親、家族、親戚と無事帰つたことを語り合い、祖先の墓参りを済ませ、心を新たに出発を誓つた。

亡き戦友に合掌。